



防災週間で「災害」について考える

わたしたちが住む日本は、地震・台風・豪雨・河川の氾濫・土砂崩れ・落雷など、自然災害の例を挙げたらきりがありません。この国で暮らすからこそ、日頃から災害に対する備えは行っておきたいものです。しかし、日々の生活に追われて、そういう余裕はなかなか見つかりません。そういうときこそ、年に一度の防災の日、あるいは防災週間に、日頃の防災対策を見直してみることをお勧めします。



9月1日は、「防災の日」と定められています。これは、9月1日は、1923年(大正12年)に関東大震災が発生した日であり、暦の上では二百十日^{*}(にひゃくとおか)に当たり、台風シーズンを迎える時期でもあります。また、1959年(昭和34年)9月26日には「伊勢湾台風」が襲来し、その被害は戦後最大のものでした。このことがきっかけとなり、1960年(昭和35年)に、災害に対する心構えなどを育成する目的で、9月1日が「防災の日」と制定されました。また、1982年(昭和57年)からは、防災の日を含む一週間(8月30日から9月5日)を「防災週間」としました。

防災週間は今日で終わりますが、常に意識しておくことは難しい「防災」を、こういう機会に身近に起こりうるものとして考えることが大切です。

昨年度も書きましたが、避難場所と避難ルートの確認や自宅から避難場所までの経路を実際に歩いて確認したり、防災グッズを見直したり家庭で災害時の対応を話し合ったりしてみたいはいかがでしょう？特に、災害時に、家族での連絡方法などの在り方などについて話し合っておくと安心ですね。

※ 二百十日(にひゃくとおか)とは

暦の雑節の一つ。立春の日から数えて210日目の日。9月1日頃になる。220日目の二百二十日とともに、台風が来襲する厄日とされ、この日を中心にして風の害を防ぐための風祭(かざまつり)を行う風習があった。古来、稲の穂ばらみ期であるので、暴風を警戒したといわれる。八朔(はっさく)(旧暦8月1日)も同じ時期にあたり、二百十日の厄日にそなえて、八朔の日に風祭をすると伝えていた土地もある。二百十日、二百二十日が暦注に現れるのは新しく、江戸時代初期以後である。

(世界大百科事典より)

4年生が社会科見学で行く予定の山都町・矢部の八朔祭りも、このような昔の人々の願いが込められていると思うと、新たな視点で見つめ直すことができますね。